

# ディルタイにおける精神科学の概念と方法

——『精神科学序説』を中心として——

峰 島 旭 雄

は し が き

物質と精神、あるいは自然と精神というような二元対立の考えは、古くから、またひろく、西洋哲学思潮のうちに見出される。そもそも、物質と精神、あるいは自然と精神のごとく、二元対立的にみることの可否が、まず問題であるが、いま、ここでは、それに立ち入る余裕はない。かりに物質と精神、自然と精神という二元対立を認めるとして、そのうえで、物質文明と精神文化、自然科学と精神科学のごときものを考えてみる。とりわけ後者は小論の主題にかかわる。自然ないし自然的世界についての学的形成はきわめて古くはじめられている。そして、十九世紀にはそれが自然科学として全盛をきわめる。これにたいして、精神ないし精神的世界についての学的形成もまた、きわめて古い起源を有する。しかし、精神ないし精神的世界の学的形成は一つの宿命をはらみ、自然ないし自然的世界の学的形成にたいていおくれる。この立ち遅れをとりもどす努力が、十九世紀から二十世紀へかけて、おこなわれる。そこには、数多くの試みが見出される。ディルタイによって唱えられた精神科学は、そのような背景を負い、そのような状況・時代に誕生した。

精神ないし精神的世界についての学の形成としては、少なくとも、精神科学と、精神そのものの学とが考えられよう。後者は、精神それ自体が自己を展開するとき、そこにみずからを形成していくとき学であるといえる。哲学は絶対精神の自己顕現・自己展開の学であるというヘーゲルの思想に、かかる学の一つの典型を見出すことができる。これにたいして、前者は、デイルタイのいうごとき意味において、精神の経験科学である。それは精神科学であるかぎりにおいて、経験科学である。「一切の科学は経験科学である」(Alle Wissenschaft ist Erfahrungswissenschaft)とデイルタイはいう。<sup>(1)</sup>とりわけ、自然科学にたいして精神ないし精神的世界の学的形成をいうときは、この経験科学としての精神科学をいうものとおもわれる。デイルタイは、かかる精神科学の概念と方法を、かれの一生を通じて説いている。もとより、精神そのものの学としての精神の学をも考慮し、その学的性格について考究することも、なすべき仕事であるが、いまここでは、経験科学としての精神科学、その顕著な一例としてのデイルタイの精神科学について、その概念と方法を一通り考察することにした。

資料 まず、デイルタイの精神科学関係の文献についてであるが、それとしては、なによりも第一に、『精神科学序説』(Einleitung in die Geisteswissenschaften, 1883)を挙げなければならない。この書は、いうまでもなく、かれの主著の一つにかぞえられている。しかし、この書は、すぐれた哲学者のすぐれた著書がしばしばそうであるように、かなりながい前史と、そして、かれの生涯のはてにいたるまでの後史とを、端的にいつて、一つの宿命——それはひろく精神科学そのものが担っているといつてよい——にまとわれている。<sup>(2)</sup>したがって、デイルタイの主著、あるいは、かれの精神科学にかんする主著はなにかといわれて、この『精神科学序説』を挙げることとは、ある意味で正しく、反面、ある意味で正しくない。少なくとも十分ではない。では、そのことについて少しく触れよう。

『序説』前史 一八三三年に生をうけたウィルヘルム・ディルタイが、かれのいわゆる精神科学なるものに関心をいだき、かつ、これを哲学的課題としはじめたのは、ほぼ一八六〇年ころと推定される。そのころのかれの一連の著作論文を取り上げてみると、次のごとくである。

一、「道徳的意識の分析の試み」(一八六四)

一、「ノヴァリス」(一八六五)

一、「一七七〇年より一八〇〇年にいたるドイツの詩的ならびに哲学的運動」(一八六七)

一、「人間・社会・国家にかんする諸科学の歴史の研究」(一八七五)

とりわけ、この最後の論文には、『精神科学序説』へと結晶すべきものの萌芽が、すでにめばえている。ディルタイは、この論文にいう「人間・社会・国家にかんする諸科学」のことを、とりまとめて *die moralisch-politische Wissenschaften* とよぶが、その歴史の研究をおこなうべきこの論文の出発点は、論理的ならびに認識論的究明であるという。<sup>(5)</sup>しばしばディルタイの哲学にたいしては、歴史主義・相対主義の名が冠せられ、それがかれの立場のすべてをおおうかのような観をあたえるのであるが、すでに一八七〇年代のこのころに、歴史の研究が論理的ならびに認識論的究明を伴うべきことが主張されていたということ、このことは注目しなければならない。ディルタイは、周知のごとく、カントの理性批判の立場を継承しているが、論理的ならびに認識論的究明とは、まさしくそのことをあらわすものといえよう。いうならば、ディルタイは歴史と論理、実在と認識との融合をくわだてたのである。その意味では、ある仕方でカントを超えているともいいうるであろう。

『序説』の構想 さて、右のごとく、ほぼ二十年間にわたった準備期間の後に、一八八三年にいたって、『精神科学序説』が現われた。ところが、この書は、未完成の書なのである。「序説」という表題の一部がそのことを物語って

いる。それは「未だ本格的なる歴史理性批判の内容的体系的研究には及んでいないというデイルタイ一流の奥ゆかしい謙譲さを指示するより外はない」ともいえよう。<sup>(6)</sup>しかし、じじつ、この書は、予定された二巻五部のうちの、一巻二部のみをふくむにすぎず、その意味では文字通り「序説」なのである。二巻五部とは次のごとくである。

第一巻・第一部……精神の個別科学 (die Einzelwissenschaften des Geistes) の概観。これは、ある意味では迂路であるが、まず、この概観をこころみる。そこには、研究のための素材と動機がふくまれている。そこから、逆に推論していく。

同 第二部……哲学的思惟の歴史をたどる。そのことによって、一般に承認されている形而上学がすでに過去のものであること、したがって、精神科学の形而上学的基礎づけの時代はすでに過ぎ去ったこと、などを示す。

第二巻・第三部……個別科学と認識の段階への歴史的発展のプロセスをたどり、現代にいたるまでの認識論的研究を紹介する。

同 第四部・第五部……精神科学の独自の認識論的基礎づけをこころみる。<sup>(7)</sup>

『序説』後史 ところが、前述のごとく、このうち、一巻二部のみが公けにされ、他の巻・部は、このままの次第では、ついに公刊されなかったのである。しかし、それだからといって、デイルタイの「序説」が序説のままにとどまり、その後の努力がなされなかったわけでは決してない。むしろ、かれは、かれの生涯のはてにいたるまで、精神科学の基礎づけと建設にいそしんだといえる。それが、ほかならぬ『精神科学序説』の後史をなすものである。これらのものを年代的に整理して示すと、次のごとくである。

# ○『精神科学序説』続巻のための準備研究(1)

一九〇四年——一九一〇年にいたるまで、プロシア科学学士院総会ないし哲学歴史部会で、研究発表六回（そのうち五回分は後記のとおり）。

一九〇五年——(a)「知識の構造連関」(Der Strukturzusammenhang des Wissens 未定稿)を研究発表。全集第七卷(一)「精神科学の基礎づけのための諸研究」の第二研究にひとしい。

——(b)「精神科学の基礎づけ、第一研究」(Erste Studie zur Grundlegung der Geisteswissenschaften 公開)。全集第七卷(一)「諸研究」の第一研究「心的構造連関」(Der psychische Strukturzusammenhang)にひとしい。

一九〇九年——(c)「精神科学の限界づけ」(Die Abgrenzung der Geisteswissenschaften 未定稿)を研究発表。全集第七卷(一)「諸研究」の第三研究にひとしい。

——(d)「体験」(Erleben 未定稿)を研究発表。

一九一〇年——(e)「理解」(Verstehen 未定稿)を研究発表。

——「精神科学における歴史的世界の構成」(Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften 公開)。これは、前記(a)―(e)の五論文をまとめたもの(ただし、(d)(e)はむしろ、後記の「続考案」のために利用されているごとくである)。全集第七卷(一)にひとしい。

○『精神科学序説』続巻のための準備研究(2)

——「体験・表現・理解」(Erleben, Ausdruck und Verstehen 未定稿)。全集第七卷(二)「精神科学における歴史的世界の構成、続考案―副題、歴史的理性批判の試み」(Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften—Entwürfe zur Kritik der historischen Vernunft)

の第一部にひとしい。前記(d)(e)の論文はここに利用されているとおもわれる（なお、全集第七巻には、このほか、「続考案」の第二部「普遍史的連関の認識」(Die Erkenntnis des universalhistorischen Zusammenhangs)や、附録「精神科学の基礎づけのための諸研究、補遺」「歴史的世界の構成、補遺」が収録されている<sup>(8)</sup>）。

右のごとき、『精神科学序説』の後史をなす、複雑にくみあわされた未定稿と、わずかな公刊論文のうちにうずもれて、ディルタイは生涯を終えたということができよう。全集の編集者グレートワイゼン (B. Groethuyzen) によれば、「続考案」第二部には、「歴史的理性批判」の語句が連ねられていたという。また、『精神科学序説』の冒頭では、この書を「歴史的理性批判」とよぶこともできると述べている。カントが果たさなかったとみられる歴史的理性批判を敢行しながら、ついにこれを完成することなくこの世を去ったディルタイのうちに、くりかえし述べるごとく、精神科学の、そしてひろくは、精神ないし精神的世界にかんする学の形成の、一つの宿命を、仄見するのである。

**ディルタイ前史** 以上は、ディルタイの精神科学関係の文献について触れたのであるが、かれの精神科学の概念と方法をさぐるには、もちろん、かれの他の諸文献——直接的あるいは表面的には精神科学に関係ないようにおもわれるものもふくめて——をも、参照しなければならぬ。<sup>(9)</sup>さらに、ディルタイを、一八八三年の主著を中心としてその前史・後史をさぐるという仕方とらえるのみではなく、ディルタイその人に先き立つ思潮と、それ以後の思潮との、影響・被影響の交錯の渦のなかでも、とらえることをこころみなければならぬ。小論の冒頭では、このことを、自然科学にたいする精神科学の立ち遅れ、そしてその取り戻し、という表現をもちいて、いいあらわした。次に、その点について、くわしく考察してみよう。

**歴史学派** ディルタイに影響をおよぼした思想あるいは哲学者は、一、二にとどまらないが、そのうち、第一に挙げ

なければならぬのは、歴史学派である。

デイルタイは、『精神科学序説』の序言で、精神科学の方法として、歴史的方法と体系的方法とを挙げている。<sup>(40)</sup>そして歴史的方法にかんして、次のように回顧している。中世の終わるところから個別科学の解放がはじまったが、それらのなかで、社会および歴史にかんする科学は、十八世紀にいたるまで、なお形而上学の奴婢にとどまっていた。十九世紀になって自然科学が勃興してくると、こんどは、社会や歴史にかんする科学は、自然科学の奴婢となる。このような経過のうちで、二つの顕著な動向がとらえられる。一つは、デイルタイが「歴史的意識と歴史的科学与との解放を実現した」と称する歴史学派であり、他は、精神科学の基礎づけを自然科学の概念および方法に適合させておこなうとしたコントやミルの一派である。<sup>(41)</sup>後者については、精神科学を「奇形にする」(verstümmeln)ものでしかない、とデイルタイはいう。しかしまた、後者にたいする反動として現われたロッツェの小宇宙論もまた、「感傷的気分」(sentimentalische Stimmung)のゆえに、採られるべきものでない、とされる。いわば、その間をぬって、デイルタイの仕事はすすめられていくのである。

さて、前者にかんしてであるが、それは、まさしくデイルタイが、それにおいて生き、そこから批判的に脱出した当のものであった。かつてカントは、理性の批判をおこなって、科学と道徳と芸術との基礎づけをなしたが、宗教と歴史については、前者にかんしては道徳の付加物として、後者にかんしては断片的な思想を残すのみで、いまだ十分な基礎づけを果たしたとはいいがたかった。ところが、カントの批判主義はドイツ観念論に受け継がれていくうちに、ふたたび形而上学的な色彩をまし、歴史にかんしては、ヘーゲルの歴史哲学のごときものが出現した。しかし、一八三一年にヘーゲルが歿すると、周知のごとく、ヘーゲル学派は分裂し、昔日の勢は色あせていった。これにかわって、デュ・ボア・レイモン、キルヒホフ、ヘルムホルツなどの自然科学者が抬頭し、十九世紀をして自然科学の世

紀たらしめる礎石をすえるのである。それと同時に、ヘーゲル流の歴史哲学にもよらず、新興自然科学にも屈従しない歴史理論が、いわゆる歴史学派によって形成されていった。ディルタイはいう。「わたしが前世紀（十九世紀）のはじめにベルリンにやってきたとき……歴史科学の、そして、その橋渡しによって、精神科学一般の、決定的な建設を遂行する大いなる運動が、その頂点に達していた」<sup>(13)</sup>。そして、そのような歴史学派の人びととして、かれはベック（Ph. A. Böckh 1785-1867）、ランケ（L. Ranke 1795-1886）、リッター（K. Ritter 1779-1859）、トレンデレンブルク（F. A. Trendelenburg 1802-72）などの名を挙げている。

ディルタイは、歴史学派をきわめて広義に解する。たとえば、かれは十八世紀の歴史的意識にくわを入れて、ドイツ精神の深みから政治的・法的諸制度の歴史的生成を説くメーザー（Justus Möser 1720-98）を掘り出している。さらに、歴史学派の祖といわれるサヴィニー（F. K. Savigny 1779-1861）がいる。この著名な法律学者によれば、個人は全体との有機的関連においてあり、現在とは過去と歴史とによって滲透されており、文化の諸体系も歴史的に生成したものである。そして、かれのかかる思想を支えるものは、浪漫主義的熱情と民族精神であった。さきほど、十九世紀は自然科学の世紀であるといったが、それはまた、歴史の世紀でもあった。メーザーやサヴィニーによって掲げられた理念のもとに、歴史学派は、個別諸科学において——比較言語学、歴史言語学、比較地理学、歴史学、哲学等々の領域において、幾多の俊秀を世に送り出したのであった。ディルタイが、前述のごとくベルリンにやってきたのは、このような時期であった。

**歴史的理性批判** しかし、ディルタイの炯眼は次のことを見ぬいた。それは、歴史学派には、哲学的基礎づけの努力が欠けているということであった。このような反省から、ディルタイは、「精神科学の哲学的基礎の問題を……解決するために、歴史的方法を体系的の方法と結びつけ」たのであった<sup>(14)</sup>。「歴史的叙述と体系的叙述とは、たがいにあい



おぎなうべきものである」ともいうのである。<sup>(15)</sup>では、いうところの体系的方法、体系的叙述とはいかなることを意味するであろうか。その意味するところは、一つには認識論と心理学への関係ということであり、他には内的経験、意識の確実性ということである。これら二つのことはまったく無関係ではない。すでに述べたごとく、デイルタイはカントのおこなった理性批判を歴史の領域でこころみようとした。そのデイルタイであるがゆえに、ヴァルテンブルクのパウル・ヨルク伯爵に『精神科学序説』を捧げて、この書をまた「歴史的理性批判」(Kritik der historischen Vernunft)ともよぼうとするのである。この批判的精神がとくに精神科学の基礎づけにさいして、認識論的反省という形をとらしめたということができる。また、かれには『記述的分析的心理学考』(Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie, 1894)にまで結晶したあたらしい心理学の提唱がある。この心理学は、その骨子をとらえていえば、了解心理学 (verstehende Psychologie) であるともいえる。そして、かれのかかる根本的立場が、精神科学の基礎づけにさいして、あらたなる心理学との関連をつよく前面に押し出させたとみることができる。

このような認識論的反省とあらたなる心理学への関連とが、第二に挙げた内的経験、意識の確実性へ通ずるものであることは、もはや明らかである。「一切の経験は、その根源的連関と、この連関によつて規定される妥当性とを、かかる経験の現われる場としてのわれわれの意識の制約のうちに、われわれの本性の全体のうちに、有する……われわれは、このような立場を、認識論的立場と名づける」というデイルタイの言葉が、<sup>(16)</sup>このことを端的に示している。かれが『精神科学序説』以下、いくたの論文において、悪戦苦闘して展開していったのは、かかる精神科学の基礎づけ——認識論的反省とあらたなる心理学への関連——であった。

右のごとく、デイルタイにたいして、肯定的・否定的のいずれにせよ、つよい影響をあたえたのは、歴史学派であり(かれはそれを脱皮した)、カントであり(かれはその精神を拡充した)、他の一群の精神科学の基礎づけの試みで

あった（その一方の極をなすコントやミルの経験論的・実証論的立場にたいしても、その他方の極をなすロツツェのイデアリスティックな立場にたいしても、かれはいずれも反対した）。そして、これらの思潮ないし哲学者との対決を経つつ、ディルタイは、自然科学におくれをとった精神科学を、独自の基盤のうえに建設しようところろみたのであった。ここでお、かれと同時代、ないしそれ以後の思潮との影響・被影響について、少しく述べておかなければならない。

**ディルタイ後史**　すでに述べたごとく、十九世紀は自然科学の世紀であるとともに、歴史の世紀でもあった。これにたいして、十九世紀末から二十世紀初頭へかけては、「精神科学の時代」ともよぶべき一時期が出現する。周知のごとく、ヴィンデルバントは、一八九四年の『歴史と自然科学』（Geschichte und Naturwissenschaft）において、自然科学的手続として法則定立的（nomothetisch）、歴史的手続として個性記述的（idiographisch）を特色づけ、それによって科学を二分した。つづいてリッケルトが、これまた周知のごとく、ヴィンデルバントの考えを發展させて、一八九九年の『文化科学と自然科学』（Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft）において、一般化的方法（Generalisierend）と個性化的方法（Individualisierend）とを分かつて、科学を二分する原理を示した。ところで、ディルタイが、一八八三年の『精神科学序説』以後、たえずこれを補うべき論文を、ときに完結して、ときに断片として、書きのこしていることは、すでに触れたとおりであるが、いま述べたヴィンデルバント・リッケルトの動向にたいして、ただちに論評を加えており、それが、一九〇四―六年ころの遺稿として残されている。それによると、まずディルタイは、この二人の哲学者が、「精神科学を自然科学に従属させる試み、あるいは、自然科学の方法に従属せよとする試みにたいして、精神科学の独自性を明らかにしたこと」において、かれ自身と意見が一致するとして、称賛の言葉をあたえている。<sup>(四)</sup>さらに、この二人が、精神科学における独自のものの（das Singulare）、個別的なもの（das Individuale）

の意義を認めた点、事実 (Tatsache) と直観されたもの (Theorem) と価値判断 (Werturteil) との結合のうちに、精神科学の徴表を見出した点もまた、是認される。<sup>(18)</sup>しかし、かれらとディルタイを分かť線も、その反面、明確である。ディルタイは、この点について、ヴィンデルバントを取り上げて、詳論している。

**ヴィンデルバントとの関係** ディルタイは、ヴィンデルバントが精神科学と自然科学との区分をなすにさいして、「代替」をおこなっている点を指摘する。まず、ヴィンデルバントにおいては、これら二つの科学の弁別の問題が、学問の最高分類にすりかえられている点が指摘される。<sup>(19)</sup>そのうえ、ヴィンデルバントは、自然科学は外的知覚にもとづき、精神科学は内的知覚にもとづく、としているが、かかる内容的な区別から出発しながら、かれは、それら両科学の認識目標の形式的性格による区分を立てようとする。すなわち、自然科学は一般的法則を求め、法則定立的 (nomothetisch) であり、精神科学は特殊な歴史的事実を求め、個性記述的 (idiographisch) であるとし、心理学をも自然科学にふくませて、これを科学の最高類とし、これにたいして、精神科学をもう一つの最高類とする。またここで、一つの代替がおこなわれる。それは、これまでの自然科学と精神科学との二分を、自然科学と歴史学の二分へとすりかえることにほかならない。たしかに、『精神科学序説』でも、自然科学的思维 (naturwissenschaftliches Denken) と歴史的思维 (geschichtliches Denken) との区分は強調されてはいた。しかし、ヴィンデルバントのなした区分の規準、すなわち、法則定立的と個性記述的によつてはかるならば、経済学もまた、心理学とおなじく、自然科学のうちへ編入されるであろう。それどころではなく、音韻の変化の法則を扱うかぎりでは言語学もまた、法則定立的として、自然科学のうちへ編入されねばならないであろう。これらに共通な性格は、特殊なものの一般的なものへの従属 (Unterordnung des Besonderen unter das Allgemeine) である。<sup>(20)</sup>しかし、このような処理を徹底しておこなえば、体系的精神科学の一切の一般命題は、認識の自然科学的部門 (der naturwissenschaftliche Zweig der Erkenntnis) に帰

属することになろう。しかも、特殊なもの、あるいは、歴史の特定の領域に共通なものは、認識の歴史的部門 (der historische Zweig der Erkenntnis) に属さしめるとなると、体系的精神科学は分裂すること必至である。また別な面から考えてみよう。歴史学なるものをきわだたせるといふ意味からして、歴史記述 (Geschichtsschreibung) のみを取り出して一つの類をつくるとしよう。そうになると、歴史学そのものの以外のあらゆる科学から、歴史記述が取り出せることになり、それらによってこの類が構成されることになろう。自然科学と歴史学という区劃は、やはり、くずれさるのである。

では、ディルタイ自身の立場は、どうであらうか。かれはいう、「一般的なものと個別化との結合のうちにこそ、体系的精神科学のもっとも独自の本質がある。」(Eben in der Verbindung des Allgemeinen und der Individuation besteht die eigenste Natur der systematischen Geisteswissenschaften.)<sup>(21)</sup> 具体的にいえば、かかる個別化、すなわち、人間的・歴史的生の諸段階、類似性、諸形式を制約する因果的関係を探求するのである。ディルタイは、あらゆる精神科学を通じて、斉一性を基礎とし、そのうえに生ずる個別化を、この基礎にかく結びつけること、いいかえれば、一般的理論と比較的考察との結合を求めることが、かれ自身の立場である、といっている。<sup>(22)</sup> リッケルトやヴィンデルバントについては、なお他の箇所でも、たびたび言及されているが、右では、とりわけ、自然科学と精神科学の区分にかんするかぎりにおいて、ディルタイの批評の骨子を略説したのである。

**フッサールとの関係** ヴィンデルバント、リッケルトのほかに、やはりディルタイに影響をあたえた哲学者として、フッサールを挙げることができる。ディルタイはフッサールから少なからず負うものがあることを明言する。知識の理論は、知識がそこにおいて成立する認識過程の体験にかかわること、また、このような心理学的予備概念は、ただ直接に体験される認識過程のうちにふくまれるものを、記述し分析するにとどまるべきこと、をディルタイは強調す

るのであるが、フッサールは、知識の理論の「厳密な記述的基礎づけ」(ein streng deskriptive Fundierung)を「認識の現象学」(Phänomenologie des Erkennens)として創始し、デイルタイの右の立場にきわめて接近しているというのである。<sup>82</sup>さらに、かれは、具体的にフッサールの著書をさへ挙げて、それからの影響について語っている。それは、一九〇〇年と一九〇一年に出たフッサールの『論理研究』第一巻・第二巻(Logische Untersuchungen, I, II)であって、「認識論にたいする記述学の評価において新紀元を画したフッサールの『論理研究』にわたしがいかに多くを負っているかを、ここにはっきりと示しておかねばならない」とまでいっている。<sup>84</sup>しかし、この場合もまた、デイルタイとフッサールを分かつ相違点は、もちろんある。その一つの重要な点を挙げれば、意味の範疇と構造の範疇との相違である。意味(Bedeutung)は、おなじく範疇といっても、分かちえない生の連関にたいする範疇であるのにたいして、構造の範疇は、生の連関のうちで回帰するものの構造分析といういみでの範疇なのである。後者のほうはブレンターノ学派によって受け継がれたが、それは心理学上のスコラ主義にはかならない。その理由は、態度・対象・内容などの抽象的実体から生そのものを組み立てようとするためである。「この点でもっとも極端なのは、フッサールである」とデイルタイは批判する。<sup>85</sup>

なお、このほかに、直接間接にデイルタイに影響をおよぼし、あるいは影響をうけ、または、ひろい意味で前述の「精神科学の時代」へなんらかの寄与をなした哲学者・思想家たちを、at randomに挙げると、<sup>86</sup> シュンスターベルク(H. Münsterberg 1863-1916)、<sup>87</sup> O・リッschル(O. Ritschl 1860-1944)、<sup>88</sup> ヴント(W. Wundt 1832-1920)、<sup>89</sup> シュプラングァー(E. Spranger 1882- )、<sup>90</sup> ロータッカー(E. Rothacker 1888- )、<sup>91</sup> トレルテ(E. Troeltsch 1865-1923)、<sup>92</sup> M・ウェーバー(M. Weber 1864-1920)などである。

以上において、『精神科学序説』成立の前史と後史のみならず、デイルタイに影響をあたえた、またデイルタイが

ら影響をうけた思想や人びと、デイルタイの思想のその意味での前史と後史とについて、概略を説述したのであるが、次に、『精神科学序説』そのものに立ち入って、精神科学の概念と方法を探らねばならない。

**自然科学と精神科学** さきほども述べたとおり、精神科学は自然科学よりおくれをとり、その結果、自然科学にたいして従属の關係にあるかのように考えられがちであるが、じつはそうではない。精神科学は自然科学とならぶ独立の全体である。それは、知識の地球儀を二分した一方を受けもつ。「このような科学の概念にぞくする精神的事実の総体は、二つの部分に分かたれるのをつねとする。その一つは、自然科学という名でよばれる。他のものは、まったく注目にあたいたすることであるが、一般に認められている名称がいまだ存在しない。わたしは、知識の地球儀 (globus intellectualis) のこの他の半分を、精神科学と名づける思想家たちの用語法にしたがう」。このように、自然科学と精神科学とに二分するにいたった動機は、「人間の自己意識の深みとその全体」に根ざしている。これは、前述の内的経験、意識の事実への根拠づけを指していることは、明らかである。デイルタイは、さらにスピノザを引用して、そのような「精神的なるものの根源」を、「帝国中の帝国」(imperium in imperio)ともよんでいる。スピノザは、このようにして、精神的世界、精神的事態を確立し、それによって、自然の王国から精神の王国、歴史の王国を分離したという。しかしながら、かかる二分法は、デイルタイのしりぞける形而上学的時代においては、自然と精神という二つの実体観にもとづいてなされた。すなわち、そこでは、「説明根拠 (Begründungsgrund) の相違が、ただちに、世界連関の客観的分岐における実体的差異として示される」のである。かかる試みが失敗に帰することは明らかである、とデイルタイはいう。デカルトの二元論を経て、機会原因論にいたると、物質的体系と精神の世界とが、二つの時計をはじめから合わせておいたかのように、一方が他方を喚起するという、荒唐無稽な考えをいただき、その馬脚をあら

わした。

そこで、次には、かかる実体的な区分のかわりに、外部知覚・感覚 (äußere Wahrnehmung, sensation) によってあたえられる外界と、心的過程および活動の内的把握・反省 (innere Auffassung, reflection) によって呈示される内界との対立が考えられた。そして、精神的世界の全体体験の分析と、自然についての一切の感官の経験とは、比較できないとされる。それは「物理的過程と精神的過程との比較不可能性 (Unvergleichbarkeit)」である。<sup>87)</sup> 精神的事実を自然の機械的秩序の事実から導出 (Ableitung) することはできない。あるいは、機械的自然認識によって確立された事実へ精神的事実を従属 (Unterordnung) させることはできない。しかし、このことは、反面、精神的事実を自然の機械的秩序の事実に編入 (Einordnung) することを、妨げるものではない。それは、いわば、比較不可能性の前提のうえに樹立される両者の相互関係である。デイルタイは、自然認識が終わるところに精神科学が始まる、という表現をもって、このことをいいあらわそうとする。「機械的自然認識によって確立された事実へ精神的事実を従属させることを排除するという仕方で、精神的世界の諸事実間の関係が、自然的過程の斉一性と比較不可能であることが示されるとき、はじめて……自然認識がそこにおいて終わる限界、そして、固有の中心点から形成される独自の精神科学がそこから始まるところの限界、が挙示される」。<sup>88)</sup>

いま、デイルタイは、精神的事実の自然認識への編入のことを語り、同時に、自然認識の限界についても語ったのであるが、さらに、むしろ逆に、精神科学が自然的事実をみずからのうちに編入することについても、語っている。「精神科学は、ひろい範囲において、自然的事実をふくみ、かつ、自然認識を基礎としている」。<sup>89)</sup> 前述のごとく、外的把握 (äußere Auffassung) と内的覚知 (innere Gewahrwerden) という二重の立場からの立論があるが、生の統一 (Lebenseinheit) としての人間を、この二つの立場のいずれかからとらえるとき、「外から内へ」と、「内から外へ」

との、二つの方向が生ずる。前者は、自然の連関を實在としてとらえ、心的事実を、かかる外界の時間的順序ならびに空間的配置に組み入れられたものとみなす方向であり、後者は、内的経験から出発して、外界全体を意識にあたえられたものとみなす方向である。前者からは、物質的変化から精神的変化へとすみゆく自然研究者の解釈が生じ、後者からは、自然全体の法則が意識の制約に依存するという、先驗哲学の立場が生ずる。ディルタイは、ここで、かれ自身は、出発点として自然科学的な観点をとる、と明言している。「われわれは、われわれの出発点として、自然科学的な観点をとる。かかる観点は、限界を意識しているかぎり、みのり多きものである」(傍点筆者)というのである。<sup>(40)</sup>このように、ディルタイは、精神科学が自然的事実をふくみ、自然認識を基礎とし、出発点においては自然科学的な観点をもとりうることを認めるのである。ただ、そのさい、つねに「限界」を意識していること、「比較可能性」を前提していること、が求められるのである。では、そのような限界における両者の接点はどのようなものであるだろうか。

**精神物理的統一** ディルタイは、ここに、精神物理的統一 (psycho-physische Einheit)、あるいは生の精神物理的統一 (psycho-physische Lebenseinheit) ということを考えている。<sup>(41)</sup>自然は精神へ影響をおよぼし、逆に、精神は自然へ影響をおよぼす。「精神的事態ならびに変化と結合しているところの物質的事態ならびに変化を、一般的自然連関が因果的に制約するという関係」である。これを目的と手段という関係でみても、事態は同様である。すべて目的は人間の精神的過程そのものの内部に存する。あるいは、目的は、精神的過程のうちにおいてのみ、人間にとって目的となる。これにたいして、手段は自然の連関のうちに求められる。「精神の創造的な力が外界にもたらした変化は、ときに目立たぬものであるが、しかも、<sup>(42)</sup>このようにして創られた価値を、他人にたいしても存在するようになる媒介は、外界にのみとづくのである。」



ところで、精神科学——人間・社会・歴史の諸科学は、前述のごとく、自然認識を基礎としている。ここで、精神的（生の）統一という、あらたに導入された観点から、この関係をいあらわせば、次のごとくである。第一に、精神科学は、精神物理的統一そのものが生物学の助けをかりて研究されうるかぎり、その基礎として自然科学をもっている。第二に、精神科学の発展ならびに目的達成のための活動の用いる手段が自然のうちにあるということ、このことから、精神科学は自然科学を基礎としている、ということが出来る。かくしてデイルタイは総括的にいう。「自然認識にたいする精神科学の問題は、出発点となったところの対立、すなわち、自然が意識の制約に従属するとなす先験的立場と、精神的なものが自然全体の制約に従属するとなす客観的経験の立場との対立が、解きほぐされたときはじめて、解決されたものと認められうるであろう<sup>(43)</sup>」。これらの論述を通じて、ひとたび対立の一方の極として揚棄される先験的立場——とくにカントの理性批判の立場——は、やはりデイルタイに残存する。この論述の最後で、かれは次のようにいうのである。「自然それ自身はいかなるものであらうとも、精神的なものの原因にかんする研究は、精神的なものの現象が現実的なもののしるしとして、また、精神的なものの共在継起の斉一性が現実におけるかかる斉一性として、解釈され利用されうるということで、満足することが出来る。しかし、精神の世界に足をふみいれ、精神の内容であるかぎりでの、また、目的ない手段として意志のうちに取り入れられるかぎりでの、自然を研究するならば、自然は精神にたいして、まさにそれが精神においてあるところのものであり（*was sie in ihm ist*）、それが自体的になんであるか（*was sie an sich sein mag*）は、*じつでな、どうでもよいことである*」<sup>(44)</sup>。この意味において、デイルタイは、やはり理性批判の立場を堅持したということが出来る。

# 精神諸科学の概観

精神科学と自然科学との相互関係、ならびに、精神科学の出発点（とくに自然科学にたいする）

を、右のごとくに規定したうえで、ディルタイは、精神諸科学の概観をこころみている。精神科学にたいするかれの根本的立場は、精神科学はいまだ建設の途上にある、という立場である。「精神科学はいまだ全体として、構成されていない。それはいまだ、個々の真理を、他の真理や経験への依存関係にしたがって秩序づけるような、一つの連関を樹立することができていない」<sup>(45)</sup>。そこで、かかる連関を樹立するために、二つのことがこころみられる。一つは、これまでの科学の分類をかえりみることであり、他は、すでに成立している諸学を精神科学の連関のうちに取り入れるかいたなかの検討である。

**学問の分類** まず第一のことについて、ディルタイはこういつている。「精神科学の領野に足をふみいれる者は……かかる百科全書の著作において、精神科学の個々のそびえたつ群を、概観するであろう」<sup>(46)</sup>。ディルタイは、シュライエルマッヘル、ベーコン、コメニウス、コント、ミルなどを例として挙げている。シュライエルマッヘルは、この仕事を神学の領域でなした<sup>(47)</sup>。ベーコンは、経験による現実の認識の問題と、その当時存在した精神科学とを関係させることによって、学問の分類をこころみた<sup>(48)</sup>。コメニウスは、おなじことを教育の領域で果たした<sup>(49)</sup>。コントは、三段階説をたてて、六つの実証科学を秩序づけた<sup>(50)</sup>。ミルは、論理学の体系のうちで精神科学ないし道徳科学の論理学を取り扱った<sup>(51)</sup>。これらの学問分類を概観して、ディルタイは、いまだそのいずれにも十分に満足しなかったという。では、かれ自身の学問分類はどのようなか。じつは、かれ自身は、とりたてて学問の分類をおこなっていない。一つには、かれの根本的立場からして、まず学問の分類をなし、しかるのちに、それに規制されてかれの哲学があるのであってはならないからである<sup>(52)</sup>。そのようなわけで、かれはまず、精神科学の分類よりはその基礎づけにこそしんだのである。そして、そのような基礎づけの仕事のうちに生涯を終えてしまったということができる<sup>(53)</sup>。かれが学問の分類をとりたてておこなわなかったもう一つの理由としては、精神科学というものの本質的なあり方というこ

とも考えられる。ディルタイが意図したとき精神科学の建設は、分類というよりはむしろ統合を、秩序ある一つの連関を、求めたのであるから、そこでは、本来、分類ということが、少なくともまず第一に問題となるべきではないのである。

**心理学** しかしながら、ディルタイは、これまでに成立している個々のいわゆる精神諸科学を吟味して、これらを、かれの意図する精神科学の関連のうちに生かすか否かを検討してはいる。その第一に挙げられるのは心理学（および人間学）である。前述のごとく、ディルタイは、出発点として、精神科学が自然科学を包摂する接点、つまり精神物理的（生の）統一というものを考えた。この生の統一の研究が「精神科学のもっとも基礎的な群をなす」のである。<sup>54</sup> かれは、このような精神物理的（生の）統一にかなする理論としては、心理学（および人間学）を挙げる。その場合、心理学の素材は歴史全体および人生の経験であるとされる。すなわち、心理学は、歴史的社会的現実の全体科学（Gesamtwissenschaft）から切り離されえず、それへの絶えざる関係においてのみ、展開されるのである。ディルタイは、「人間学と心理学とは、歴史的生活にかなする一切の認識、および社会の指導・進展にかなする一切の規則の基礎である」という。<sup>55</sup> あるいはさらに、「心理学は、精神の個別科学のうちで、最初にして、もっとも基本的なものである」ともいう。<sup>56</sup> ただ、ここで、いうところの心理学は説明的心理学ではなくて、ディルタイの主張する記述的・分析的心理学であることは、いうまでもない。<sup>57</sup> かれは次のごとくいう。「心理学が、事実および事実における斉一性を確定する記述的科学の限界内にとどまるとき、そして、精神生活の全連関を一定の仮定によって導出しうるものたらしめようとする説明的心理学を、はっきりと自己から区別するとき、心理学は、かかる基礎的な科学の課題を解きうるのである」。<sup>58</sup>

**社会学・歴史哲学** 次にディルタイが挙げる個別科学としては、社会学がある。心理学が、個々の精神物理的統一

の分析をことにしたいして、社会学は、歴史的社会的現実の全体を対象とする。自然はわれわれにたいして無言である。自然はわれわれにたいして超然たる静止の表現をもつことができる。自然はわれわれにとって「よそなるもの」(tremd)である。これにたいして、社会はわれわれの世界である。われわれは、社会における相互作用の働きを、われわれの全存在をあげて、全力をもって、共同体験する (mit erleben)。社会は自然にたいしてこのような特色を有する。<sup>(59)</sup>そして、社会のかかる特色が、自然研究から区別される社会研究の特徴を規定することになる。社会研究——社会にたいする反省的思惟——は、二重の出発点をもつ。一つは、個体が、社会という全体において意識的に活動をおこない、活動の規則をつくり、精神的世界の連関におけるかかる活動の制約を求める。そこで、社会にかんする諸科学は、まずこの方向にそって、個体の意識——みずからの活動とその制約についての——から生じることになる。文法学・修辭学・論理学・美学・倫理学・法学、さらには政治学・歴史学などがそれである。ここで注目すべきことは、ディルタイが、かかる社会にかんする個別科学の分離が理論的悟性の技巧によるのではなく、「生それ自身がかかる分離をひきおこした」といっている点である。<sup>(60)</sup>さきほども閑説したごとく、ディルタイにあっては、分類が先であるのではない。かえって、「生それ自身」が分離・分類を可能ならしめるのである。

社会にたいする反省的思惟の出発点の一つについては、右のごとくである。もう一つの出発点は、個体が、直観する睿智としてふるまい、自己の認識のうちに全体を捕捉しようとするものである。精神にかんする実証的科学が次々と独立し分離したあとで、それら個々の理論の相互関係、および、歴史的社会的現実の包括的全体への関係を確立すべしという要求が、現われた。かかる「間隙」に精神哲学・歴史哲学・社会哲学が誕生し、そこへ入りこんだ。しかし、これらのものは、たえず発展する科学 (stetig sich entwickelnde Wissenschaften) にまではいたらなかった。そこに社会学が、これらのものにとって代わるべき使命をもって、登場した。<sup>(62)</sup>

しかし、ディルタイは、社会学にたいして否定的である。かれは、歴史哲学もふくめて、これら二つの学は現実の学（科学）wirkliche Wissenschaften ではないという。<sup>62</sup>あるいは、それらは、それらの課題をみずから解くことができない、とされる。<sup>63</sup>歴史哲学は、歴史的現実の連関を、この連関に対応する、結合された命題の統一への連関によって、認識しようとする理論である。<sup>64</sup>歴史哲学は、かかる統一を、歴史的過程の計画のうちに、根本思想（理念）のうちに、あるいは、発展法則によってあらわされる方式ないし方式の結合のうちに、見出した。しかし、ディルタイはかかる「還元方式」は成立不可能であると考ええる。歴史的経過が、一つの方式または一つの原理の統一へ還元できないのは、あたかも生理学が生命を一つの方式または一つの原理の統一へ還元できないのとおなじである。<sup>65</sup>ディルタイは、この状況を、円を等積の四辺形にして面積を求めようとする円の求積法にたとえている。「歴史哲学は、そのあるがままの姿においては、円の求積法に苦しむ」。<sup>66</sup>この姿は、いいかえれば、歴史的社会的現実にかんする個別科学の限界に立つものの姿である。<sup>67</sup>ディルタイはいくつかの例を挙げている。シュライエルマツヘル——自然全体への理性貫徹の原理を説く。ヘルダー——人間性の原理を説く。カント——摂理の計画のうちに歴史の連関を見出す。ヘーゲル——神（絶対精神）の自己発展説。これらは、一般的理性や世界精神のごとき形而上学的實在（metaphysische Wesenheiten）を代置して、歴史はその発展であると考えている。ディルタイは、これらは総括して、形而上学であるという。<sup>68</sup>たとえ、一般的理性や世界精神のかわりに、社会という言葉をもってきたとしても、なんら変わりはない。コントはその代表者である。このようにして、ディルタイは、歴史哲学のあり方を否定する論をすすめて、社会学のあり方を否定する論にまでいたるのである。<sup>69</sup>

たしかに、社会学が用いた方法によれば、いわゆる形而上学的な時期というものは排除され、実証哲学の時期がひらかれる。しかし、実証哲学の創始者であるコントのなしたことはなんであったか。かれのなしたところは、ヘーゲ

ルやシェライエルマッヘルのなしたところよりも、はるかに歴史的過程の事実に適合しないのである。かれは、自然主義的な歴史の形而上学 (naturalistische Metaphysik der Geschichte) を創ったにすぎない。

ディルタイは、さらに、『精神科学序説』の補遺のなかでも、「社会学」という一項で、社会学がここで取り上げようとしている意味での科学になりえないことを、くりかえし論じている。かれは、コント・スเปนサー・シェフレ (A. E. F. Schaffle 1831-1903)、リリエンフェルト (P. Lilienfeld 1829-1903) らによって考えられた社会学、とくにその発展段階説にたいして反駁するのだといっている。それは、人間社会において事実上生起する一切のことを、一つの科学 (eine Wissenschaft) において総括しようとするような科学である。人間社会の歴史の経過のうちに、人間社会において生起する一切のものは、同一の対象の統一へと総括されねばならない、というのが、この科学の根底にある原理である。あるいは、この科学は、社会のうちに、社会において働く分化と統合のうちに、さまざまな関心の連帯性のうちに、共通の利益にかなうような秩序へと社会が進みゆくことのうちに、統一的な原理を認め、宗教性や芸術や道徳や法は、そこから説明されるとする。ディルタイは、このような社会学から生ずる誤謬を四つほど挙げて、かかる社会学を「形而上学的」であると断じている。<sup>(71)</sup>

ところで、科学という名称ないし機能によって、右のごとく統一的な原理 (einheitliches Prinzip) をかならず中核としそれによって成立するごときものを、想定する場合もあるが、なお、もう一つ、次のごとき場合も考えられる。すなわちそれは、統一的な原理をもたず、社会における生の織りなしのうちから、個別科学として引き出されてくる一切の精神科学の、一つの総括という意味での科学である。この場合、かかる科学は、心理学の基礎のうえに現われる個別科学を、認識論的・論理的・方法的見地から総括した、エンチクロペディである。それは「精神科学の哲学」 (die Philosophie der Geisteswissenschaften) であるにすぎない。<sup>(72)</sup> このように考えて、ディルタイは、最後に、「社会学

は、要するに、ある大きな説明原理にしたがって社会的事実を取り扱うところの、数多の研究にたいする名称、説明的方法の指針にたいする名称である。それは、科学にたいする名称ではない」とまでいいきるのである。<sup>(73)</sup>

**精神科学の認識論的基礎づけ** このように、心理学にたいしては、説明的心理学は別として、肯定的態度を示したディルタイも、歴史哲学や社会学、かれのいわゆる形而上学にたいしては、否定的態度を持する。それでは、かれ自身が精神科学を樹立しようとするにさいし、その依るところはなにであるか。第一部第十九章の「精神の個別科学にたいする認識論的基礎づけの必要」は、そのことを語りだしている。そこでディルタイは、精神科学の認識論的基礎づけ (eine erkenntnistheoretische Grundlegung der Geisteswissenschaften) を展開するといふ課題について語り、「この課題の解決は、歴史的理性の批判、すなわち、自己自身および自己によってつくられた社会・歴史を認識する人間の能力の批判、と称せられてよからう」といっている。<sup>(74)</sup> この言葉は明らかにカントを想起させるものがある。カントは形式論理学にたいして認識論的論理学を考案して、批判の仕事をなしたとげた。ディルタイもまた、その歴史的理性批判の仕事をなしたとげるべく、やはり一種の認識論的論理学を構想する（もつとも、その認識とは、せまい意味での認識ではない）。「精神科学の基礎づけは、認識、論と、論理学とを結合し、学派的な営みにおいてエンチクロペディないし方法論とよばれる課題の解決を準備する」。<sup>(75)</sup> ただし、これには一つの条件がつけられている。それは、かかる問題は精神科学の領域にかぎる、ということである。したがって、方法論としての論理学を考えても、それは精神科学の方法論としての論理学である。ディルタイは、ヘルムホルツやジグヴァルトを引用したあとで、「論理学は、認識論的基礎づけと個別科学との中間項としてあらわれる。……近代科学の内面的連関は、これによって成立する」と述べている。<sup>(76)</sup> ここには、歴史哲学の形而上学的立場では解決しえないような問題を解決すべしという要請が、あらわされている。

歴史的回顧 『精神科学序説』の第一部は、右のごとき論述で終わり、第二部「精神諸科学の基礎としての形而上学、その支配と崩壊」に接続する。つまり、歴史的回顧へ転ずるのである。デイルタイはあくまで慎重であって、自己自身の思想を、ただ端的に述べるということなく、おおむね、かかる歴史的回顧をまずこころみるのである。いまの場合でも、論理学と認識論との結合、あるいは、精神科学の認識論的基礎づけの提唱があったのみで、ただちに歴史的回顧がおこなわれているのである。このことは、逆にいえば、いまだそれらのことにかんして、十分な論述がなされていないことにひとしい。歴史的回顧が終わったあとでも、ふたたび、精神科学の方法論へたちもどって、これを *bearbeiten* する試みは、『精神科学序説』のかぎりでは、少ない。

歴史的回顧は、まず、ヨーロッパにおける神話的観念と科学の発生についてなされる。科学の発生とともに形而上学の発生についても語られる。次に、古代民族の発展における形而上学的段階について語られる。プラトン、アリストテレス以下、懐疑派にいたるまで、叙述されている。ついで、近世ヨーロッパ民族の形而上学的段階について。ここでいう近世は広義であって、キリスト教、アウグスティヌス、中世思想の第一期、第二期まで、ふくまれている。最後に、現実にたいする人間の形而上学的態度の解消について語る。これは狭義の近世の範囲内についての説述である。

デイルタイは、ここでも、執拗に、形而上学を問題とする。かれは問う、「精神領域の形而上学を、分析的研究によって排除した精神科学は、その分析の始点および終点としての人間のうちに、新形而上学への通路を、見出すのであろうか。それとも、あらゆる形式における精神的事実の形而上学が不可能となったのであろうか」<sup>m</sup>。カントが、素質の形而上学と学としての形而上学を分かったことは、あまりにも有名であるが、デイルタイはここで、明らかにカントを意識しつつ、学としての形而上学 (*Metaphysik als Wissenschaft*) は不可能である、と断定する。形而上学は理想として論理的世界連関を夢みるが、形而上学的世界連関は、悟性によっては一義的に規定されえないし、さら



に、世界の内面的客観的連関は、証示することができるものではない。すなわち、学としての形而上学は不可能である。

『統考案』への展望　ディルタイは『精神科学序説』を終えるにあたって、形而上学——懷疑論——カント *versus* 実証論——認識論的基礎づけという系譜を数えあげている。それらは、いわば、精神科学の認識論的基礎づけの前奏曲なのである。形而上学に影のごとくそってきた懷疑論は、われわれがわれわれの印象のなかに閉じこめられていること、その印象の原因を認識せず、外界の實在的性質について、なんら確言できないこと、を指摘した。感官による一切の感覚は相対的であって、それを生ぜしめるものへの推理をゆるさない。原因の概念でさえも、われわれが物のうちに取り入れた関係であるから、かかる関係を外界に適用すべき権利根拠はない、というのである。表象についてもおなじことがいえる。思惟と客体の一致の観念は、漠然たるものでしかない。なぜならば、物が表象とは独立な実在と考えられているかぎり、表象は物とひとしいことはありえないからである。表象は、物が精神のなかへ移し入れられた場合の名称ではないから、物とあいおおうものではない。かかる懷疑論者の権利継承者は、認識論者である（たとえば、ヒュームの懐疑によって独断のまどろみから醒めたカントを考えよう）。この場合、われわれは限界に達している。近代の科学的意識は、一方、相対的に独立な個別科学の事実によって制約され、他方、客体にたいする人間の認識論的態度によって制約されている。実証論は主として前者の側面で哲学建設をおこない、先験哲学は、後者の側面で哲学建設をおこなった。限界というのは、この点をいう。ここでは、人間の形而上学的態度が終わり、認識論的態度が帰結されてくる。精神科学の認識論的基礎づけが提唱される背景には、このような系譜がある。

この系譜をたどることによって、同時に、次に書かれるべき書物の内容が、ほぼ指示されることになる。いま述べた「限界」、かかる限界から叙述をあらたにはじめよう、とディルタイはいつている。人間の形而上学的態度が終

わるところから次篇をはじめたい、ともいう。そして、「客体にたいする認識論的態度によって制約されている、近代科学的意識の、精神科学にたいする関係の歴史」の叙述が、予告される。そして、「いまや、内面的生活の現実を、とらわれることなく覚知し、この現実から出発して、自然および歴史が、かかる内面的生活にとって、いかなるものであるかを確定することが必要である」という言葉をもって、『精神科学序説』は終わるのである。<sup>(79)</sup>

では、右のごとくディルタイが予告したとおり、次篇が書かれたかという点、すでに検討したように、それは、そのとおりにはおこなわれなかったといわざるをえない。いくつかの論文と遺稿が、われわれの手に残されている。次に、それらの内容の概観のみをおこなおう。ディルタイは、『精神科学序説』においては、文字通り「序説」の段階にとどまり、立ち入って精神科学の概念と方法について語っていないことができる。そこで、残されたこれらの論文や遺稿によって、『精神科学序説』を補い、あるいはさらに、これを完成へもたすことが必要である。次に掲げる概観には、そのような意味がふくめられている。<sup>(80)</sup>

# 一、「精神科学の基礎づけ、第二研究。心的構造連関」

## (1) 基礎づけの課題・方法・順序

### (2) 記述的予備概念

# 一、「精神科学の基礎づけ、第二研究。知識の構造連関」

## (1) 対象的把握 (das gegenständliche Auffassen)

### (2) 対象的把握 (das gegenständliche Haben) 感情・意欲

# 一、「精神科学の基礎づけ、第三研究。精神科学の限界づけ」

# 一、「精神科学における歴史的世界の構成」

- (1) 精神科学の限界づけ
  - (2) 自然科学と精神科学における構成の相違——歴史的定位
  - (3) 精神科学の連関についての一般的命題
    - (i) 対象的把握
    - (ii) 精神科学の構造
      - (a) 生と精神科学（イ、生    ロ、生の経験    ハ、生における態度の区別、ならびに、生経験における陳述の種類    ニ、生と生経験の負荷者としての觀念的統一    ホ、個人ならびに共同体の生からの精神科学の生成    ヘ、精神科学と生との連関、および、精神科学の普遍妥当性の課題）
      - (b) 精神的世界のあたえられ方（イ、体験から発する代現作用 *Repräsentation*    ロ、理解 *Verstehen* における相互依存    ハ、二つの科学の絶えざる交互作用による、生表出の漸次的闡明）
      - (c) 生の客観化
      - (d) 作用連関としての精神的世界
- 二、「精神科学における歴史的世界の構成、統考案——歴史的理性批判の試み」
- (1) 体験・表現・理解（*Erleben, Ausdruck, Verstehen*）
    - (i) 体験と自叙伝
      - (a) 歴史的理性批判の課題
      - (b) 覚知・実在・時間（*Innewerden, Realität, Zeit*）
      - (c) 生の連関

- (d) 自叙伝
- (ii) 他人ならびにその生表出 (Lebensäußerungen) の理解
  - (a) 生の表出
  - (b) 理解の根本形式
  - (c) 客観的精神と根本的理解
  - (d) 理解の高次形式
  - (e) 自己移入・追構成・追体験 (Hineinversetzen, Nachbilden, Nacherleben)
  - (f) 解 釈
- 補遺 (イ、音楽的理解 ロ、体験と理解 ハ、理解の方法 ニ、解釈学 ホ、理解の限界)
- (iii) 生の範疇 (die Kategorien des Lebens)
- (iv) 伝 記
  - (a) 伝記の学的性格
  - (b) 作品としての伝記
- (2) 普遍史的連関の認識 (die Erkenntnis des universalhistorischen Zusammenhangs)
  - (i) 統 考 案
    - (a) 根本関係——歴史的形態の構造
    - (b) 一切の歴史的連関の構造
    - (c) 歴史的言表の主体

- (d) 文化体系
- (e) 宗教とその組織
- (f) 世界観と哲学
- (g) 人類と普遍史
- (h) 体系の本質
- (ii) 統考案
  - (a) 歴史の問題
  - (b) 国家
  - (c) 世代
  - (d) 普遍史的連関
  - (e) 論考の結論

小論は、副題にも示したごとく、『精神科学序説』を中心として、ディルタイの精神科学の概念と方法を考察したのであるが、この書がすでに「序説」としての性格をおびているだけに、小論もまた、本題にかんしての序説にとどまった。ディルタイの立場にたいする批判をもふくめて、右に掲げた「精神科学序説——統考案」の諸論文についての論究は、他の機会にゆずらざるをえない。

註 (1) W. Dilthey, *Gesammelte Schriften* (WW) Bd. I, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, Vorrede XVII.

(2) この仕事の一端は、拙稿「比較哲学方法論における二、三の問題」(『フィロソフィア』第四七号)において、取り扱われている。

(3) カントは批判という基礎のうえに、自然の形而上学と道德の形而上学とを打ち建てようとし、第三批判たる『判断力批判』の序言で、これで批判の仕事を終えた、残り少ない余生を、自然と道德の形而上学の建設にいそしもう、と述べながら、ついに、少なくとも自然の形而上学については、一書を残すにいたらなかった。ハイデガーも、その主著『存在と時間』を第一部と称し、ディルタイにひとしく、章・編までを暗示しながら、現在にいたるまで、明らかな形では第二部を公刊していない。本文にいう「一つの宿命」とは、このようなことを指す。

(4) J・S・ミルが、その主著『論理学体系』(A System of Logic, Ratiocinative and Inductive, 1843)のなか、とくに第六巻で、こんどちのいわゆる(そしてディルタイのいう意味での)精神科学を問題とこつて、その標題を“On the Logic of the Moral Sciences”とこつてゐると、そのなかでまた、歴史的方法(Historical Method)を説き、実践の論理・技術に道德と政治をよぐまじめていゝこと、などは注目されよう。ディルタイはしばしばミルをいふて触れてゐる——ただし、それは反駁の意図からではあるが。e. g. WW I, XVI, XVII, S. 5, 23, 31, 90, 105-108, 116, 133; WW VII, S. 111.

(5) Dilthey, Menschen, Gesellschaft, Staat; WW V, S. 49.

(6) 宮島肇「歴史と解釈学——ディルタイ歴史哲学序説」四八頁。

(7) WW I, Einleitung, Vorrede XIX.

(8) 水野・細谷・坂本訳『歴史的理性批判』(ディルタイ全集第四巻)総序、参照。

(9) ディルタイの他の著書を若干挙げよう。Leben Schleiermachers, 1870; Die Einbildungskraft des Dichters, 1887; Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie, 1894; Das Erlebnis und die Dichtung, 1910.

(10) WW I, Einleitung, Vorrede, XV.

(11) Ebenda

(12) Ibid, XVII. ミルと精神科学の問題については、拙稿「J・S・ミル『論理学体系』における論理と倫理——精神科学の基礎づけへの序曲——」(未定稿)参照。

- ㉔ WW V, Rede zum 70. Geburtstag, S. 7.
- ㉕ WW I, Einleitung, Vorrede, XV.
- ㉖ Ebenda
- ㉗ Ibid., Vorrede, XVII.
- ㉘ Ibid., Zusätze, S. 411.
- ㉙ Ibid., S. 411-412.
- ㊱ WW V, Über Vergleichende Psychologie, Beiträge zum Studium der Individualität, 1895/96 : I. Naturwissenschaften und Geisteswissenschaften, S. 242.
- ㊲ Ibid., S. 257.
- ㊳ Ibid., S. 258.
- ㊴ Ebenda. 心理学の比較的研究の目的と範圍「比較心理学の目的と範圍」の標題より
- ㊵ WW VII, Studien zur Grundlegung der Geisteswissenschaften, Erste Studie : Der psychische Strukturzusammenhang, S. 10.
- ㊶ Ibid., S. 14.
- ㊷ Ibid., Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften, Die Kategorie des Lebens, S. 237.
- ㊸ 心理学の原理 Ⅰ “Grundzüge der Psychologie, Bd. I ; Die Prinzipien der Psychologie, 1900 ” “Philosophie der Werte, 1908 ” “The Eternal Values, 1909 ”
- ㊹ 因果の考察 Ⅰ “Die Causalbetrachtung in den Geisteswissenschaften, 1901 ”

- ㊦ 逻辑学の概観ニ关スルモノ “Logik, 2 Bde., 1880–83” “System der Philosophie, 1889” “Einleitung in die Philosophie, 1901”
- ㊦ 逻辑学の概観ニ关スルモノ “Die Grundlagen der Geschichtswissenschaft, 1905” “W. Dilthey, 1912” “Lebensformen, 1914” “Der Sinn der Voraussetzungslosigkeit in den Geisteswissenschaften, 1929”
- ㊦ 逻辑学の概観ニ关スルモノ “Einleitung in die Geisteswissenschaften, 1920” “Logik und Systematik der Geisteswissenschaften, 1927” “Geschichtsphilosophie, 1934”
- ㊦ 逻辑学の概観ニ关スルモノ “Das Historische in Kants Religionsphilosophie, 1904” “Psychologie und Erkenntnistheorie in der Religionswissenschaft, 1909” “Gesammelte Schriften, Bd. III; Der Historismus und seine Problem, 1922” “Bd. IV; Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie, 1925” “Der Historismus und seine Überwindung, 1924”
- ㊦ 逻辑学の概観ニ关スルモノ “Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 3 Bde., 1921–22” “Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922” “Wirtschaft und Gesellschaft, 1922” “Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik, 1924”
- ㊦ WW I, Einleitung, S. 4.
- ㊦ Ibid., S. 5.
- ㊦ Ibid., S. 6.
- ㊦ Ibid., S. 7.
- ㊦ Ibid., S. 11.
- ㊦ Ebenda
- ㊦ Ibid., S. 14.



(40) Ibid, S. 15. 精神科学の基礎づけにいそしんだディルタイが、自然認識を軽視したり、一概に排除したりしたのではないこと、注目したい(三枝博音訳『ディルタイ精神科学序説』訳者序参照)。

(41) Ibid, S. 17.

(42) Ibid, S. 18.

(43) Ibid, S. 20.

(44) Ibid, S. 21.

(45) Ebenda

(46) Ibid, S. 22. 学問の分類ならし科学の分類がここにかかわってくる。それとごまかす学問論(Wissenschaftslehre)が、精神科学の百科全書的分類の底に、やはり見出されなければならない。

(47) F. Schleiermacher, Kurze Darstellung des theologischen Studiums, 1810. なお、ディルタイ自身、シタライホルマンへの研究あたり、次のように大著をあらわしている。Leben Schleiermachers, 1870.

(48) F. Bacon, The Advancement of Learning, 1605.

(49) J. A. Comenius, Magna Didactica, 1632.

(50) A. Comte, Cours de philosophie positive, 1830-42.

(51) J. S. Mill, A System of Logic, 1843; August Comte and Positivism, 1865.

(52) 精神科学の建設に同様にいそしみ、同時に広汎な諸領域にわたって学問の分類をおこなっている哲学者としては、他にW・ヴァントがいる。かれの場合は、at randomに学問の分類をなした。そこにはprincipleがない、という批評がくだされている。註(24)参照。なお、拙稿「W・ヴァントにおける精神科学の概念と方法」(未定稿)参照。

(53) しかしまた、そのような基礎づけの努力を通して、おのずから、あらたな分類の規程がうちたてられ、しかもそれが外面的ではなく、かれの哲学の核心からほとばしりであるものとして、樹立されていった、ともいえる。それによって、個々の精

神諸科学がそれぞれのところを得て配列される結果になっているということもできる。

54 WW I, Einleitung, S. 28.

55 Ibid., S. 32.

56 Ibid., S. 33.

57 デイルタイは、自然科学の心理学である説明的心理学 (erklärende Psychologie) ではなくて、精神生活の内容を追体験して了解する記述的・分析的心理学 (beschreibende und zergliedernde Psychologie) をもって、精神科学の第一、ないし基礎としたのである。「説明的心理学は、精神的事実を自然の機械的連関に従属させることをもってはじめ、この従属は、現代にまでその働きをおよぼしている」とデイルタイはいう。それは、心理的原子論 (psychischer Atomistik) ないし心理的力学 (psychische Mechanik) といふべきであらう (WW I, Einleitung, S. 377, 378)。

58 WW I, Einleitung, S. 32.

59 Ibid., S. 36 f.

60 Ibid., S. 39.

61 デイルタイは、なお、芸術・科学・国家・社会・道徳・宗教などを対象とする「文化体系の科学」(die Wissenschaften von den System der Kultur) と、法を典型とする「社会の外的組織の科学」(die Wissenschaften der äußeren Organisation der Gesellschaft) とを挙げている (WW I, S. 49, 64)。これらは、精神物理的統一体の個別科学とともに、デイルタイのいわんとする精神科学の三分肢をなすとみてよい。

なお、デイルタイは、文化体系の科学をいうとき、関連して、体系とはいかなるものであるかについて語っている。「個々のものは、歴史的社会的生活の相互作用のうちにおいて活動している。個々のものは、そのもてる力をいきいきと働かすことによって、多様な目的を表現することを求める。……かくして、人間の本質的な生活目的は、歴史および社会を貫通している。科学は、一切の認識作用の根底によこたわる理由律にしたがい、人間性の一要素にもとづき、しかも個人を超越するところ

ろの目的関連の範囲内において、かかる目的関連を構成する個々の心理的ないし精神物理的要素間に成立する依存関係、および、それらの性質間に成立する依存関係、を確立しようとする。……わたしは、このような目的連関をあらわす表現として、体系の語をえらぶ」(WW I, S. 43f.)。デイルタイはさらに言葉をそえて、宗教の体系、という意味では、シュライエルマッヘルがこれを果たした、といっている。「シュライエルマッヘルは、かかるもっとも一般的な種類の依存関係を、宗教の体系という範囲内において、宗教的感情の事実と教義学ないし哲学的世界観の事実とのあいだ、また、宗教的感情の事実と礼拝ないし宗教的交わりの事実とのあいだに、確立した」(Ibid., S. 44f.)。また、「シュライエルマッヘルの深い宗教分析によって明瞭に意識されるようになった教義史と教義学との主要問題は、これら二つの学のうちに、宗教、とくにキリスト教の本性にもとづく教義相互の依存関係の様式を、おくことにある」(Ibid., S. 45)ともいっている。

<sup>62</sup> WW I, S. 86 ff.

<sup>63</sup> デイルタイは、社会学と歴史哲学とを扱うにあたって、「われわれは、歴史的社会的現実にかんする、これまで形成された個別科学の限界に立っている」といっている (WW I, S. 86)。この限界において個別諸科学を統合すべく、社会学や歴史哲学が現われるのであるが、それらは、その意図する役割を果たしえないのである。

<sup>64</sup> WW I, Einleitung, S. 93.

<sup>65</sup> Ibid., S. 95.

<sup>66</sup> Ependa

<sup>67</sup> Ibid., S. 86. 註<sup>69</sup>参照。

<sup>68</sup> Ibid., S. 95, 100.

<sup>69</sup> ここで、デイルタイが、歴史哲学にせよ、社会学にせよ、否定的に取り扱っている理由に注目したい。かれはいう、「一般的理性のかわりに、統一体としての社会をおいたとしても、なんの変化も生じない。これを統一体たらしめるきずなは、体験 (Erlebnis) から一ひの方式 (Formel) へ変せられるかぎりにおきて、形而上学的なるものがある。」(WW I, S. 101. 傍点

筆者)ディルタイ自身は、そのような方式へ変せられる以前の、体験そのものをとらえようところみるのである。

(70) WW I, Zusätze : Soziologie, S. 420.

(71) Ibid., S. 422 f.

(72) Ibid., S. 422.

(73) Ibid., S. 423. このことが述べられている補遺は、しばしば文章も乱れていることがある。たとえば、*entweder* を用いながら、*oder* がついに現われず、文が終わるといった具合である。しかし、逆な言い方をすると、それだけに、かれの端的な考えが表明されているともいえる。

(74) WW I, S. 116.

(75) Ebenda

(76) Ibid., S. 119.

(77) Ibid., S. 384.

(78) Ibid., S. 407.

(79) Ibid., S. 408.

(80) 本論考九六頁以下参照。